

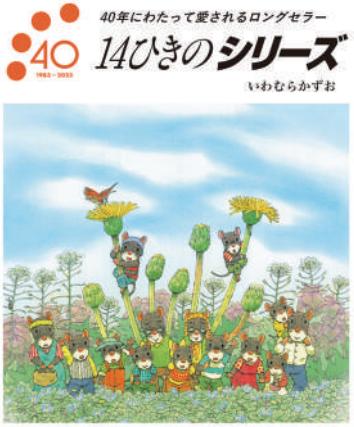
● いわむら かずお・プロフィール



1939年東京生まれ。東京藝術大学工芸科卒。板木橋画廊所属作家。主な作品は「14ひきのあさごん」(『絵本にっぽん』など)、「14ひきのシリーズ」、エリック・カールとの合作絵本「どこへいく? To See My Friend! (童心社)」、「ひとりぼっちはいしゅうれっしゅ!」(雄成社)、『タケイ里出農文化賞受賞本)、「かんがえるカエルくん」(福音館書店)、『黒旗社出版文化賞受賞本)、「トガリ山のぼうけん」(雄成社)などがある。88年板木橋画廊開廊(現・西麻布画廊)にて「いわむらかずお絵本の庄美術館」を開館。絵本・自然・子どもをテーマに活動を続けている。2014年、フランス藝術文化勳章ショヴァリエを受章した。

14ひきのシリーズ40周年記念 パネルセット 計7枚

1枚/A4サイズ (210mm × 297mm)
6枚/A3サイズ (297mm × 420mm)



家族といっしょ。自然といっしょ。

1983年7月、「14ひきのシリーズ」は誕生しました。

自然とともにくらす。野ねずみの大家族。

「14ひき」の物語は、国をこえ、世代を超えて愛されつづけています。

童心社

● 「14ひきのシリーズ」がうまれたとき

「14ひきのシリーズ」の発想は、私たち家族の「ひっこし」からはじまりました。1970年、私が里住んだのは東京、多摩丘陵の公園住宅でした。31歳の時です。周囲には新木林や灌木など庭園植物が立ち並んでいました。新木林と共に私の心にこもる愛で育んでいた深風景を呼びました。

それはある晩悲しい事件が終ったあと、家もなく食べるのもろくにない貧しい子どもたち。8月の一ヶ月間に、人気漫画が暮らす隣りで生活でしたが、両親が少しでも生活を改善しようとさまざまな工夫をするのを、小学生の私は見ていました。外に出ると周囲は古い椎木林でした。いつも日暮れまで児童や近所の仲間と一緒に遊びました。夏の夕暮れのヒグラシの声、林を駆けける鹿の声、山の流れる川の音……。

新木林と出会しさうくなつて歩き回っているうちに、「14ひき」のイメージがふくらんでいました。費がそれらうに、これは自分にとって大切な作品になるに間違いないと思うようになりました。私は主人夫たゞと同じような暮らしをしながら、この絵本を書いていくことを始め、物語を語る若者たちが大勢いる様子のもので、必ず手伝ひに来ます。この2次元の引っ越しは、自然のかたちを家族の暮らしと「14ひき」の世界を重ねることになっていきました。

1983年、「14ひきのひっこし」と「14ひきのあさごん」が同時刊行されシリーズが始まりました。それから40年、シリーズは12作となり、今も継続されています。海外では、フランス、ドイツ、中国、台湾、スイス、ルーマニア、ベルギーなど16ヶ国語で翻訳出版されました。

1984年、新木橋画廊開廊(現・西麻布画廊)にて「14ひきの庄美術館」が開設されました。絵本と自然の実体作品とともに、14ひきの世界の空間表現ともいえる美術館です。このごろうれしいのは、大人の来訪者の多くが子どものころからの読者だということです。むかしかただらけの絵本を孫子と共に楽しんでいる人たちが増えているのです。親から子へ孫への継承、ロングセラーリングなうらはほほ笑ましいでしょう。

©Katsuaki Iwamura 1983-2023 ©Katsuaki Iwamura 2023



14ひきの世界

● 知っていましたか? 表紙とカバーの絵のひみつ

「14ひきのシリーズ」などの作品は、表紙とそれにかかっているカバーの絵がちがうということ、みなさんはご存じですか?

14ひきものねずみが登場するこのシリーズ、表紙と表紙かかれたカバーははずして表紙といっしょに見ながらひらめかせていくことができます。そのように読めることを考えたとき、カバーと表紙が同じではおかしくないので? といついていわむらかずおの考ひから、迷ひが解かれることになりました。

ページをめくる音から、「14ひき」の物語ははじまっています。

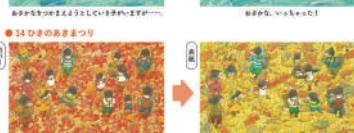
● 14ひきのひっこし



● 14ひきのせんたく



● 14ひきのあきまつり

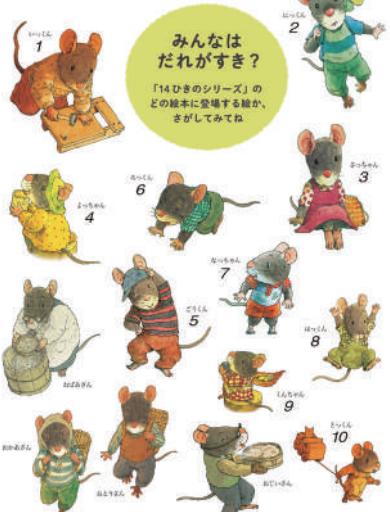


世界中で愛されて1,500万部!

14ひきのシリーズ



● 14ひきの家族



みんなは
だれがすき?

「14ひきのシリーズ」の
どの絵本に登場するか、
さがしてみてね